

弘法さんかわら版

発行編集部

大塚耕平事務所

☎052-757-1955

Kouhei@oh-kouhei.org

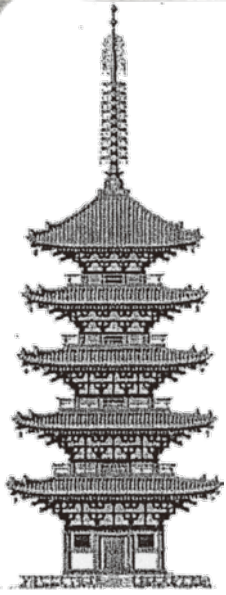
皆さん、こんにちは。令和元年、新緑の季節になりました。つい薄着になりがちですが、風邪など召されぬように、くれぐれもご自愛ください。今年**は実録・覚王山日泰寺縁起**をお伝えしているかわら版。世界的に**本物と認められている仏舍利(お釈迦さまのご真骨)**がなぜ日泰寺に祀られたのか。その歴史を探訪していきます。

★石川舞台

一八九八年(明治三十一年)、インドとネパールの国境近く、**ピプラ**ーワで発見された本物の仏舍利(お釈迦さまのご真骨)が仏教国タイの**チュラロンコン国王**から日本に分骨されることになりました。

駐タイ公使**稲垣満次郎**と**青木周蔵**外相から仏舍利奉迎使節団の派遣を要請された仏教界。いち早くこれに呼応したのは東本願寺(直宗大谷派)の当時の実力者、**石川舞台**参務でした。

その背景にはふたつの理由があったようです。



ひとつは、当時は日本仏教が廃仏棄釈の受難から日本仏教が復興し始めた時期。仏舍利奉迎を主導することで、大谷派が仏教復興の中心的役割を果たそうと考えていたようです。もうひとつは元陸軍の**岩本千綱**との関係。岩本は退役後にタイに渡り、タイの王室や要人とも知遇を有する存在でした。チュラロンコン国王の方針を知らされた東京滞在の**リットン・ロナルト**駐日タイ公使は、旧知の岩本に分骨・奉迎事業が円滑に進むよう、協力を要請しました。そこで岩本は、交流のあった石川舞台にその旨を伝えたそうです。人間関係のご縁というのは不思議なものです。

★釈尊御遺形奉迎使節団

石川の努力もあって、日本への分骨決定から二ヶ月後の**一九〇〇年(明治三十三年)四月**、当時の主要十三宗五十六派の管長が協議し、仏舍利奉迎を決定するとともに、**帝国仏教**会が組織されました。

帝国仏教会は仏舍利奉安所と奉迎事務所を**京都妙法院**に設置。貴族の子弟が歴代住持を務める別格寺院を**門跡**と言いますが、妙法院は青蓮院、三千院とともに**天台三門**と称されてきた古刹です。



右、大谷光演
上、清沢満之



協議の結果、タイに派遣する仏舍利奉迎使節団は以下の奉迎正副使四人、随行者十四人の合計十八人で結成されることとなりました。

正使は東本願寺の次期法主に内定していた**大谷光演(句仏上人)**。この時、若千二十五歳。光演の教育係は名古屋生まれの明治の学僧、仏教改革者として著名な**清沢満之(まんし)**。光演が奉迎する仏舍利が、後に名古屋に奉安されることになるのも奇縁です。

副使は曹洞宗の**日置黙仙**(後の永平寺貫主)、浄土真宗本願寺派の**藤島了穩**、臨済宗の**前田誠節**。

副使の日置は静岡県にある曹洞宗の名門寺院、**可睡斎(かすいさい)**の斎主。後年、日泰寺の住職となり、日泰寺造営には可睡斎の雲水たちが活躍しました。

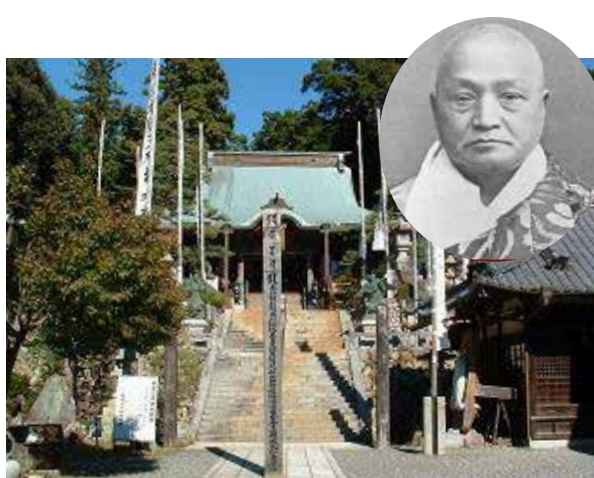
随行者の筆頭、**南条文雄**は日本の文学博士第一号。語学に堪能で、バンコクでの奉迎事業では大活躍したと伝わっています。なお、奉迎使節団の正式名称は**釈**

尊御遺形奉迎使節団。「遺形」は「いけい」または「ゆいぎょう」と読みます。仏舍利に敬意を表した表現です。

五月二十二日、奉迎使節団は京都を出発。翌二十三日、神戸港から**博多丸**で出航。翌二十四日に門司に入港し、二十六日朝、タイに向けて日本を離れました。

使節団は、香港、サイゴンを経てシンガポールに上陸。六月八日、**シंगाポール号**に乗り換えて出航。**六月十一日**、バンコクに到着しました。

当時の新聞によると、バンコクでは花火が打ち上げられ、街中に日本とシヤムの国旗が掲揚され、歓迎の人々で溢れていたそうです。



静岡の曹洞宗寺院可睡斎と日置黙仙

★ワット・ポー寺院

いよいよバンコクでの仏舍利分骨、奉迎の式典です。六月十九日にバンコクを離れるまでの九日間。この間、奉迎使節団は**ワット・ポー寺院**で仏舍利を拝受します。来月はその模様をお伝えします。乞ご期待。